

令和6年度地区別研究協議会（県西地区）実施報告

1. 日 時 2024 年 11 月 20 日（水）9:00～15:30
2. 場 所 アリーナ、サブアリーナ、応接室（講師待機室として）
3. 目 的 県内の中・高等学校の体育担当教員を対象に、実技指導等の研修を行い、
体育指導者の指導力の向上を図り、学校体育の改善充実に資する。
4. 講 師 寺山 由美 先生（筑波大学体育系准教授 舞踊研究室）

5. タイムスケジュール

9:00～9:30 受付
9:30～9:50 開講式@会議室
10:00～12:00 講師講義@会議室
12:00～13:20 昼食@会議室
13:30～14:20 模擬授業（1年5組）@アリーナ
14:30～15:15 研究協議@サブアリーナ
15:15～ 閉講式@サブアリーナ

6. 参加者

高等学校教員 32 名
中学校教員 1 名

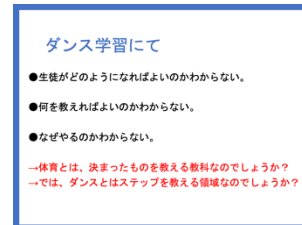
計 33 名

7. 実施内容【午前：講義】

午前中は寺山先生より「今日の講義・授業実践を通して、ダンスの授業をやってみたいと思うこと」というゴール設定をもとに講義を行った。

（参加した教員の中で）ダンスを体育の授業であまりやっていない教員が多いという事前のヒアリングがあったので、以下の3点の問いをもとに講義が進んでいった。

- ① 生徒がどのようになれば良いのかわからない
- ② 何を教えてば良いのかわからない
- ③ なぜやるのかわからない



上に書かれた問いに対する結論は「できる・できない」「上手い・下手」ではなく「即興表現を大切にする」ことが重要だというものだった。

何かを教えた瞬間に「できる・できない」「上手い・下手」という捉えかたになってしまい「無理やりやらされた感、やった感」が出てしまうということだった。

その中で、共通して大事になってくるキーワードが「大きく動く（極限性）」と「メリハリをつけて動く（緩急）」であり、それをテーマに講義の最後の時間を使って教員だけで実技の実践を行った。

内容は、4人組になり音楽に合わせて1人の動きを残りの3人が真似をするというものだった。

先述した通り、何かのステップを覚えることや、その動きが上手に見えるか否かという観点ではなく、動きの極限性や緩急を大事にしながら実践を行った。

「与える」から「引き出す」

⇒即興表現を大事にしている

→アクティブ・ラーニング（レシピがないとできない料理）
→＜私＞の身体に出会うこと、即興の動きからわかる自分

→振りを教えた瞬間から「できる」「できない」になって
小さな動きになる
→そもそも、最初は即興（ストリートダンス、阿波踊り）

- 全ての教育に共通
- 学びの本質がある

8

実践してみてください

・一度でやめないこと

・指導言語

→ まずほめる「いいね！」
→ 皆自信がない

・生徒さんが変化するのはよくわかって楽しいですよ！

→ 誰もが変わりたい、成長したいと思っている

21

7. 実施内容【午後：授業実践】

午後の授業実践では、古河二高１年５組の生徒を対象として、リズムダンスを行った。

内容としては、ペアをどんどん変えていきながら１分ほどの曲を踊れるようになるろう、というものであった。午前中の講義でもあったように、「こういうステップがあるから、練習してみよう」という基礎を積み上げるような授業ではなく、「そばの出前のように！」「エックス、シャキーン！」のように言語を使って極限性、緩急を最大限に引き出すような実践を行った。

いくつかの動きを行った後、ペアでダンスを行い、最終的にはペアがどんどん入れ替わりながら踊り続けるという内容を行った。

気づいたら、大きく動いている。

気づいたら、普段関わることが少ない生徒同士が笑顔で交流している。

気づいたら、時間が来ている。

最初に話をした時には「ダンスか、苦手だな」という顔をしていた生徒も前向きに、楽しそうに取り組んでおり、参加した教員、生徒にとって学びある時間になった。

